

# 平成 2 年度赤潮対策事業

## 東部瀬戸内海シャットネラ赤潮広域共同調査（抄録）

吉田 正雄・大塚 弘之・萩平 将  
喜内 浩・高木 俊祐

.....徳島県農林水産部水産課

本調査は、東部瀬戸内海の水塊構造と水塊の動き並びにシャットネラ属の栄養細胞の発生、増殖について、全体像を立体的に把握し、予察技術の確立に資することを目的として、瀬戸内海東部関係 4 県および南西海区水産研究所、民間機関と共同して前年度に引き続き実施した。

### 調査方法

1. 調査期間：平成 2 年 5 月 21 日～8 月 30 日
2. 調査対象水域：播磨灘南東海域（4 地点）、紀伊水道西部海域（6 地点）図 1。
3. 調査回数：5 月～6 月は週 1 回、7 月～8 月は週 2 回、計 23 回。
4. 調査項目：水温・塩分（全地点）・溶存酸素量・栄養塩・シャットネラ以外のプランクトン組成（1 地点）、シャットネラ栄養細胞（全地点）。

なお、調査は東部瀬戸内海シャットネラ赤潮広域共同調査指針に基づき実施し、結果は速やかに取りまとめ機関へ送付され、情報の円滑化が図られた。

本調査の詳細は「平成 2 年度赤潮対策技術開発試験、シャットネラ赤潮被害防止技術開発試験、東部瀬戸内海シャットネラ赤潮広域共同調査報告書」を参照されたい。

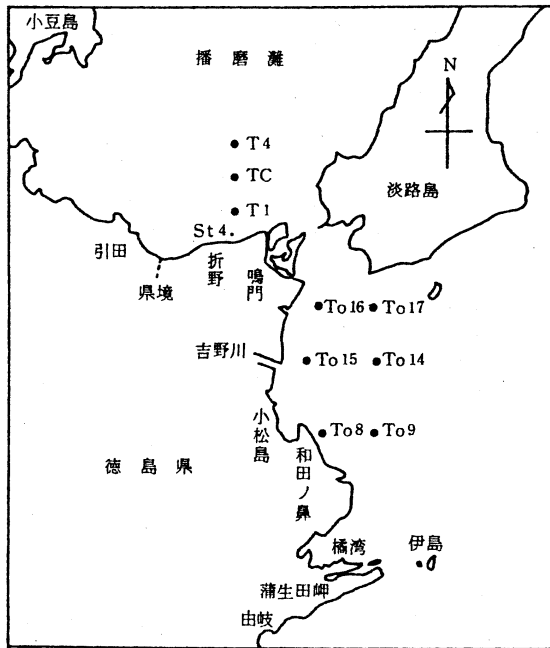


図1 徳島県担当海域調査地点

## 調査結果の概要

### 1. 播磨灘南東海域

#### 1) シャットネラ栄養細胞の出現状況

シャットネラ（アンティーカ、マリーナを含む）は、6月21日に濃縮試料から0.01cells/mlを本年初めて検出し、その後8月30日まで認められた。この間、出現数は非常に少なかったが、7月下旬～8月上旬の間には若干の増加がみられ、最高出現数は7月30日に沿岸域で2cells/ml、沖合域で1cells/mlであった。なお、球形シャットネラは、5月および7月中旬～8月上旬の間に出現し、7月下旬に若干増加が見られたが、最高出現数はシャットネラ同様に7月30日に沿岸域で8cells/ml、沖合域で3cells/mlであった。

#### 2) 水温・塩分の推移

水温は、表層では沿岸域で20.5～27.9、沖合域で19.7～27.7の間で推移し、前年に較べ全般的に高めで経過した。特に7月下旬～8月上旬の間における1m層水温は2～3以上の高めで推移した。一方、底層では沿岸・沖合域共に前年とほぼ同様に経過し、7月5日に20を越えた。

塩分は、表層では沿岸域で30.9～31.8、沖合域で31.2～32.0の間で推移し、前年同様に大きな変動は見られなかったが、前年に較べ5月下旬～7月下旬の間は平均0.3の低目、8月上旬以降は徐々に高くなり平均0.4の高目で推移した。

### 2. 紀伊水道西部海域

#### 1) シャットネラ栄養細胞の出現状況

シャットネラの出現は、播磨灘とほぼ同様な出現推移を示し、7月19日～8月20日の間に検出された

が、播磨灘と同様に増加することなく推移し、最高出現数は8月6日に沿岸(T0.15)域で5cells/ml、沖合(T0.14)域で3cells/mlであった。また、球形シャットネラは、5月下旬～8月下旬の間に出現したが、小康状態で推移し、最高出現数は8月2日に沿岸域で9cells/ml、沖合域で4cells/ml検出されたのみであった。

## 2) 水温・塩分の推移

水温は、表層域では前年度に比べ5月下旬～6月中旬に平均0.7の低目、6月下旬～8月下旬の間は、全般的に高目で推移し、7月下旬以降では平均1.2の高目であった。

塩分は、表層では前年度に比べ5月下旬～7月上旬の間は1.2の低目、7月中旬以降は平均0.9の高目で推移した。